『英語圏児童文学会会報』2024 年春季号　掲載

「論文とは何か」をもう一度考える

『Tinker Bell』第 69 号編集委員会

『Tinker Bell』第 69 号が 3 月に刊行の予定となりましたが、今回、同号の投稿論文審査において、編集委員の間で共有された懸念がありました。ひと言で言えば、それは執筆者が「論文とは何か」が分かっていないのではないかと思えるものが散見されたことです。複数の投稿論文について、書式、構成、スタイル、執筆の目的や論述の手続きに対する十分な配慮がなされていないように見受けられました。

言うまでもなく、学術論文は読者を想定した文章であり、一定の規格と研究分野の慣習に沿って作成されるものです。その規格として投稿規定があり、『Tinker Bell』の場合、その規定は、文学研究の慣習として MLA スタイルに則るよう指定しています。それらを確認し、そのルールに従うことは執筆者として当然のマナーです。

しかしより基本的なこととして重要なのは、論文とは定式化された文章であることを、執筆者が正しく理解することです。論文とは「問いと答えと論証を備えた論述形式」であり、第三者に批判的に読まれることを想定した文章です。ですから、そこに個人的な感想や主観的な評価が介在する余地はありません。客観的かつ具体的な論文を作成するために、論者は自分の疑問を具体的に提示し、それに対する答えを普遍化された手続きで、明快な根拠に基づいて論証する必要があります。またその内容については、必ず第三者が検証可能でなければなりません。そうした準備を整え、読者の批判的検証に耐え得る論述を行うのは、ひとえに論者の責任においてなされるべき義務です。論者はこうした義務と責任を自分の論に対して負いますし、また論文執筆に際して遵守すべき研究者としての倫理があります。

では研究者の倫理とは何かと言えば、「自分の論を客観的で普遍的なものとすべく、可能な手続きを取るよう努力する」ことです。具体的には、研究対象を適切に読み込み、先行研究を確認し、自分の問題意識を明確な形で提示すると共に、それが先行研究に対してどのような関係にあるかを具体的に説明することです。当然ながらその際に、他者のもの、自身のものを問わず、先行研究を剽窃することは決して許されません。他人の意見と自分のそれとを明確に区別し、また先行研究の主張や見解を恣意的に用いることなく、つねに一次・二次資料を的確かつ誠実に扱うことが求められます。また研究論文の性格上、きちんと理解できていない、或いは調査ができていない事柄については曖昧にしたりはぐらかしたりせず、自分が分かっていること、また資料等で客観的に

確認できることだけを述べ、その上で自分の論証について全幅の責任を負うことが、学術論文に対する研究者としての倫理です。

論文執筆に際してもう一つ忘れてはならないことは、論文とは批評的実践であり、論者は扱う作品や資料に対して、批評的距離を保ちながら批判的検証を重ねる必要があるということです。論証とは、自分の見解を支持する研究を取り込み、それと相容れない主張を排除して自論を補強することではありません。そうではなく、自分の問いと主張が、共に賛否いずれの立場からも合理的に評価され判断されるように、自分の議論を客観化する過程を論証と呼ぶのです。そのためには、論文は必ず自身に対する反証可能性――自分の議論の誤りを確認できるような反証の余地――を担保する必要があります。自論が主張していることが「議論の余地のない真実」であるならば、それは最早論文ではありません。自分の理解や説明が適切か、自分の主張が妥当か、ということは、それが読者である第三者によって批判的に検証され、可能性として反論される余地があることによって、初めて確認できます。そうした反証可能性を意識し、つねに読者との対話と検証に対して開かれた議論を展開できるよう備えることが、論文執筆に際して必要不可欠な批評的態度です。

以上を簡潔にまとめると、次のようになります。

・投稿する学術雑誌の投稿規定と、その研究分野の慣習を熟知しそれを遵守する
・論文とは、自らが立てた「問いと答えについて客観的かつ批判的に論証する」文章形式であり、第三者の批判的検証に対して開かれていることを理解する
・論文を客観的で検証可能なものとすることが研究者としての倫理である
・論文が批評的実践である以上、自らの議論に対してつねに反証可能性を担保する

学術論文が研究者個人の業績として評価される以上、そのために私達がその成果を必要としている現実は確かにあります。しかし同時に論文を書くという作業は、何よりも先達から得た知見と蓄積に基づいて、私達一人一人が広大無辺な知の領野に貢献する実践であることを自覚しなくてはなりません。本学会の誰もが研究者としての義務と責任を理解し、その上で研究に励まれることを、切に願います。

参考文献

戸田山和久『最新版　論文の教室　レポートから卒論まで』NHK 出版, 2022.